

俳人協会 茨城県支部

事前投句

俳句大会作品集

日時 令和五年四月二十一日

場所 水戸市・茨城県立青少年会館

講師 權未知子先生

俳人協会理事

主催 『群青』共同代表
俳人協会茨城県支部

入賞作品（二十二句）

二二二 8	料峭や研ぎし刃物の匂ひ立つ	吉江 正元	一一二 5	冬董はがきいちまい出しに行く	高井まさ江
二二 2			一一三 5		
一〇 7 ②	妻あればこそ余生や根深汁	小川みのる	一二六 5	松過ぎのゆっくりと煮る五目豆	市村喜美子
三位 3			一四四 4		
三九 7 ①	つんつんと糸引いて凧励ましぬ	永山 憲子	二五八 4 ①	百年の廊の軋みや冬の寺	早田維紀子
四位 4			一五五 4		
二五 6 ②	麦の芽の高さに風の渡りけり	金子 浩子	三七九 4 ①	卒業やラストダンスの赤き靴	関 道子
五位 5			一六六 4		
三一八 6 ①	燕来る手斧削りの太き梁	印南 美都	五八 4	懐郷や幾何の模様の蟻の道	大竹多可志
六位 6			一七七 4		
一七 6	まづ会ひに行く日を印す初暦	和田あみこ	一〇三 4	老後とは今かも知れぬ餅を焼く	永山 憲子
七位 7			一八八 4		
九八 6	河豚喰うて話大きくなりゐたり	平野 悦子	二四二 4	かたくりや筑波古道の水の音	東海林茂美
八位 8			一九九 4		
一六七 5 ②	耐ふること多き人の世鳥帰る	小木津閨子	二四七 4	冴返る雨情生家に津波跡	飛田キミ子
九位 9			二〇〇 4		
三一 5 ①	はじめてのうさぎ当番風光る	笹川 昌子	二七九 4	春二番小舟の軋む舟溜り	飛田 伸夫
一〇位 10			二二二 4		
四七 5 ①	貼り替へて障子大きく見えにけり	平野 悦子	三四一 4	茶の花や施設へ行つたきりの友	田中 ゆず
一一位 11			二二二 4		
四〇八 5 ①	雛仰ぐ今も亡き子と正座して	清水 仙里	四一一 4	探梅や座するに適ふ石ひとつ	山城 啓子

講師 俳人協会理事・『群青』共同代表 權 未知子 先生 選

特 選

二五 6 ② 麦の芽の高さに風の渡りけり

金子 浩子

二二三 2 ① 立春や厨にあらふ貝の音

坂本ふく子

三一八 6 ① 燕来る手斧削りの太き梁

印南 美都

佳 作

三一 5 ① はじめてのうさぎ当番風光る

笹川 昌子

四九 2 折り鶴の翼日脚の伸びにけり

平野 悦子

九〇 1 隠沼のまほらに春の氷かな

安達とよ子

九二 3 ① 啓蟄や磨きあげたる消防車

平野 悦子

一二六 5 松過ぎのゆっくりと煮る五目豆

市村喜美子

一八五 1 囀や身に細波の立ち初むる

天下井誠史

二二二 2 和菓子でも買ひに行きたくなる日永

栃木絵津子

二二六 2 水戸友部土浦牛久初電車

森 道子

二三二 8 料峭や研ぎし刃物の匂ひ立つ

吉江 正元

二四五 1 滾つ瀬のしぶきかかれり草氷柱

飛田キミ子

二五七 2 病棟の外階段を雪女

早田維紀子

二七九 4 春二番小舟の軋む舟溜り

飛田 伸夫

三〇三 2 にぎはしき橋のたもとやつばめ来る

海老原元彦

三六五 1 銅犬にこぼしてやりぬ年の豆

井川 水衛

四一一 4 探梅や座するに適ふ石ひとつ

山城 啓子

俳人協会・茨城県支部 支部長 大竹 多可志 選

特 選

一〇〇 1 ① 着ぶくれて鏡の前を素通りす

平野 悦子

一五八 2 ① 文字うすき妻の家計簿木の葉髪

石塚 一夫

四〇八 5 ① 雛仰ぐ今も亡き子と正座して

清水 仙里

佳 作

一〇 7 ② 妻あればこそ余生や根深汁

小川みのる

一七 6 まづ会ひに行く日を印す初暦

和田ゑみこ

二六 2 花丸を見せ合ふ子らや下萌ゆる

金子 浩子

四二 1 今年また赤い句帳を買ふ良夜

平野 悦子

六四 3 寺町の足湯にふたり笹子鳴く

助川 孝子

九二 3 ① 啓蟄や磨きあげたる消防車

平野 悦子

一〇三 4 老後とは今かも知れぬ餅を焼く

永山 憲子

一六三 1 目に耳にひかり溢るる春の水

益子 勝江

二五三 1 ロケットの打ち上げを待つ島の春

黒沢 雪乃

二五七 2 病棟の外階段を雪女

早田維紀子

二六六 3 何やらの呪文吐きさう墓

石川 昌利

二六九 3 戦なき国の日溜り冬すみれ

後藤 仙松

三七九 4 ① 卒業やラストダンスの赤き靴

関 道子

四〇三 1 魁の水戸の紅梅咲きにけり

松井 節子

四一四 1 利休忌や音なく落つる藪椿

山城 啓子

特選

特選

二五 6 ② 麦の芽の高さに風の渡りけり 金子 浩子
 一九九 3 ① 鉄匂ふ反射炉跡や下萌ゆる 由木 まり
 三三八 1 ① 花吹雪寅さん団子よく売れる 須貝 明庵

一六〇 2 ① 泣き尽くし色褪せしたる涅槃絵図 石塚 一夫
 二七七 1 ① 春大根恥しそうに抜かれけり 猿田 俊子
 三七五 3 ① 夢ありてこそその明日や花万朶 宇田川世都

佳作

佳作

一三 5 冬董はがきいちまい出しに行く 高井まさ江
 一七 6 まづ会ひに行く日を印す初暦 和田ゑみこ
 六四 3 寺町の足湯にふたり笹子鳴く 助川 孝子
 七六 3 春雷や石垣持たぬ水戸城址 安方 墨子
 九八 6 河豚喰うて話大きくなりぬたり 平野 悦子
 一〇三 4 老後とは今かも知れぬ餅を焼く 永山 憲子
 一二九 1 麗らかやテラスにパンとカプチーノ 道口 育子
 一五七 3 ① 寒の夜の攻め焚きに入る登り窯 石塚 一夫
 一六一 3 雪しまく津軽に響く撥捌き 益子 勝江
 二一〇 3 北窓を開く遠くの山容れて 栃木絵津子
 二二二 8 料峭や研ぎし刃物の匂ひ立つ 吉江 正元
 二二六 1 松の花乳鉄錆噴く薬医門 吉江 正元
 二七九 4 春二番小舟の軋む舟溜り 飛田 伸夫
 三〇七 3 ゆつたりと膝に猫ある小春かな 浅野とし子
 四一一 4 探梅や座するに適ふ石ひとつ 山城 啓子

一〇 7 ② 妻あればこそその余生や根深汁 小川みのる
 二〇 1 梅ごちや細く引きたるこけしの目 和田ゑみこ
 四三 1 枯るるな水は流れてゆきにけり 平野 悦子
 六〇 1 冬桜はにかむやうな枝の先 小貫 清美
 九八 6 河豚喰うて話大きくなりぬたり 平野 悦子
 一一〇 2 ① 長き夜やさてこれからが吾の世界 永井 弘子
 一三三 1 彩も香も抜けて冬山輝けり 道口 育子
 一五五 1 遠筑波青田を過る雲の影 九条 道子
 一六八 1 闘ひは生ある限り黄水仙 小木津閨子
 二〇五 1 情念の抜け殻あわれ寒椿 相川智登子
 二四二 4 かたくりや筑波古道の水の音 東海林茂美
 三〇二 1 もらひたる手にあたたかき芹の飯 海老原元彦
 三三一 3 たんぼぼの一輪に庭動きけり 矢須 恵由
 三三六 2 素つ気なく切れし電話や月おぼろ 須貝 明庵
 三七九 4 ① 卒業やラストダンスの赤き靴 関 道子

特 選

一〇七 ② 妻あればこそその余生や根深汁 小川みのる

一一〇 ② ① 長き夜やさてこれからが吾の世界 永井 弘子

三〇四 ② ① 合格証書手に少年は夢語る 海老原元彦

佳 作

七 ③ ① 独り居の息災を知る千蒲団 村田 敏子

二五 ⑥ ② 麦の芽の高さに風の渡りけり 金子 浩子

二六 ② 花丸を見せ合ふ子らや下萌ゆる 金子 浩子

四七 ⑤ ① 貼り替へて障子大きく見えにけり 平野 悦子

五七 ① 昭和挽歌自転車で来る蛭売り 大竹多可志

六五 ① 梅含むもう母のぬめ茅の家 助川 孝子

八八 ① 女子会へ出かける妻の春コート 坏 文雄

一〇八 ① 春よ春女医のピンクの聴診器 海老沢静夫

一五四 ① SLの汽笛伸びやか花吹雪 九条 道子

一九九 ③ ① 鉄匂ふ反射炉跡や下萌ゆる 由木 まり

二四七 ④ 牙返る雨情生家に津波跡 飛田キミ子

二五二 ① 落の墓今日は六ヶと子にメール 黒沢 雪乃

二八一 ③ 手話の子と手話の母親百千鳥 飛田 伸夫

三七四 ① 銀輪の若き等の声風薫る 宇田川世都

四〇八 ⑤ ① 雛仰ぐ今も亡き子と正座して 清水 仙里

俳人協会茨城県支部 役員特選句

名誉会員

小川みのる

三九 7 ① つんつんと糸引いて凧励ましぬ

永山 憲子

局長 飛田 伸夫

一五七 3 ① 寒の夜の攻め焚きに入る登り窯

石塚 一夫

局次長 坂場 俊仁

二五八 4 ① 百年の廊の軋みや冬の寺

早田維紀子

局次長 永山 憲子

一〇 7 ② 妻あればこそ余生や根深汁

小川みのる

幹事 矢須 恵由

一〇九 2 ① 草笛を吹いてふるさと忘れ得ず

永井 弘子

幹事 岡崎 桂子

九七 2 ① 一団の去つて茅の輪をくぐりけり

平野 悦子

幹事 松浦 敬親

二二五 1 ① 暫女歌の歌ひ継がれて春の宴

眞家 葬風

幹事 鹿熊 登志

一六七 5 ② 耐ふること多き人の世鳥帰る

小木津閨子

幹事 草野 大作

三六 1 ① 豆電球消しゆくやうに柿を挽ぐ

永井 弘子

幹事 久保田至誠

七 3 ① 独り居の息災を知る干蒲団

村田 敏子

幹事 大山とし子

三七九 4 ① 卒業やラストダンスの赤き靴

関 道子

幹事 大西 朋

九二 3 ① 啓蟄や磨きあげたる消防車

幹事 清水 仙里

四七 5 ① 貼り替へて障子大きく見えにけり

幹事 栃木絵津子

一六七 5 ② 耐ふること多き人の世鳥帰る

監事 平野 悦子

一六四 1 ① 蛇の目差しかけ花の二の丸三の丸

監事 和田ゑみこ

三一 5 ① はじめてのうさぎ当番風光る

幹事 井川 水衛

八四 1 ① 青春の二人に返る初電車

幹事 永井 弘子

三四六 1 ① 逃水やいまだつかめぬ夢ありて